

第7節 ベンショ塚古墳出土埴輪の評価

ベンショ塚古墳で出土した埴輪には、円筒埴輪と形象埴輪があるが、原位置で出土したものは墳丘1段目平坦面の円筒埴輪列のみである。また、攪乱を受けているため全体を復元できる埴輪はない。ここでは、諸特徴からベンショ塚古墳出土埴輪の編年の位置づけを検討する。

第1項 埴輪全体の特徴

まず、埴輪全体を俯瞰した際に、出土した全ての埴輪に黒斑がみられず、窖窯焼成によるものであることがわかる。王権中枢部における窖窯焼成の普及は、埴輪検討会編年Ⅳ期以降に位置づけられる。

胎土は、赤褐色系のものが多く、円筒・形象埴輪ともに概ね同様の特徴であり、同一の埴輪生産地から供給を受けたものとみられる。

第2項 円筒埴輪の特徴

抽出できる特徴として、外面調整に着目する。ベンショ塚古墳出土円筒埴輪には、静止痕のあるヨコハケ（B種ヨコハケ）を施すものが確認できる。B種ヨコハケはBb種～Bd種へと漸次的に推移していくことが知られているが、一定数の出土がなければその比率をうかがい知ることができない。ベンショ塚古墳では、突帯間が完存する個体がないため、Bb・Bc種を区別するのも難しい。しかし、確認できた個体では工具が2周するBb種ヨコハケであるものが多く、静止痕のないCa種ヨコハケであるようなものも含まれる。

また、突帯間隔は不明確であるが、図44-3では約14cmに復元することができる。

第3項 形象埴輪の特徴

形象埴輪も小片ばかりであるが、いくつか編年する上での特徴をもつ個体がある。なかでも、蓋形埴輪は形象埴輪編年のなかでも核となる分類と編年が示されており（小栗2007）、これに沿って特徴を抽出する。

ベンショ塚古墳出土蓋形埴輪は、立ち飾りの破片であり全体の形状は不明確であるが、その文様は把握できる。図45-19では、内外二重に囲郭する構成で、内郭の外枠線に二線帯が使用される。小栗分類では鍵手文f1文様に位置づけられるもので、類例には奈良市平塚1・2号墳、室宮山古墳などがあるが数は少ない。

その他、比較的破片数のある鞍形埴輪は、全体の形状や銚部の表現方法等から編年されており、その特徴を抽出できない。渦状部の表現も大阪府野中古墳（5世紀中頃）や橿原市四条7号墳（5世紀後半）などと類似する

が、比較的時期幅のあるものである。

第4項 ベンショ塚古墳出土埴輪の評価

以上のように、ベンショ塚古墳出土埴輪は、小片であり特徴の抽出が非常に困難であるといえる。それでも抽出し得た特徴から埴輪編年のなかでの位置づけを試みる。

円筒埴輪は、突帯間隔が14cm程度である可能性が高いが、大和北部地域ではコナベ古墳で13～16cm（Ⅲ-2）、ウワナベ古墳で8～16cm（Ⅳ-1）、杉山古墳で12.5cmをピーク（Ⅳ-1～2）、ヒシャゲ古墳で10.5cm（Ⅳ-3）であり（鐘方1997）、概ねⅣ-1～2段階の様相に近く、Ⅳ-3段階までは下らない。

大和北部地域におけるB種ヨコハケの比率は不明確ながら、古市古墳群ではⅢ-2～Ⅳ-1期までBb種を主体とし、Ⅳ-1期でBb＋Bc種となり、Ⅳ-2期にはBc種が主体をしめるようになる（木村2018）。ベンショ塚古墳では全て窖窯焼成であり、確実にBc種とみられる個体がない点や、Ca種ヨコハケと思われる個体を一定数含むことからみても、Ⅳ-1期の様相に類似する。

また、形象埴輪で着目した蓋形埴輪の立飾文様は、内郭の外枠線に二線帯を使用するf1文様で、これが単線に置き換わるf2文様はⅣ-2段階以降定型化するものとして知られる。f1文様であるのはⅢ-2段階の平塚1号墳・室宮山古墳、Ⅳ-1段階の平塚2号墳・河合町川合大塚山古墳（村瀬2014）であり、焼成を考慮すれば平塚2号墳出土例に近い印象をもつ。

これらをまとめると、概ね円筒・形象埴輪の編年の位置づけは、埴輪編年Ⅳ-1段階に位置づけることができる。完全に窖窯焼成を採用しているものの、円筒埴輪では突帯間隔がやや広く、B種ヨコハケもBb種を主体としつつ、採用率は未だ高くはない状況である。形象埴輪でも蓋形埴輪はⅢ期の文様構成を意識したもので、定型化するⅣ-2段階以前の特徴をもつことは評価できる。

（村瀬）

引用文献

- 小栗明彦 2007 「蓋形埴輪編年論」『埴輪論考Ⅰ』大阪大谷大学博物館
- 鐘方正樹 1997 「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内Ⅰ』奈良市教育委員会
- 木村理 2018 「古墳時代中期における古市古墳群出土埴輪の系統と生産」『考古学研究』65-1 考古学研究会
- 村瀬陸 2014 「川合大塚山古墳群表採埴輪の検討」『関西大学博物館紀要』20 関西大学博物館